

αMプロジェクト2020-2021

## 約束の凝集

Halfway Happy

vol. 1 曾根裕 | 石器時代最後の夜

vol. 1 Yutaka Sone: The Last Night of the Stone Age

ゲストキュレーター: 長谷川新 (インディペンデントキュレーター)  
Guest Curator: Arata Hasegawa (Independent Curator)

2020年8月29日(土)～2020年11月14日(土) ※オープニングパーティ等はございません。  
13:00～20:00 日月祝休 入場無料

会場: gallery αM  
〒101-0031 東京都千代田区東神田1-2-11 アガタ竹澤ビルB1F  
tel: 03-5829-9109 fax: 03-5829-9166  
<https://gallery-alpha.com>

制作協力: スタジオ四半世紀 鑫裕石业有限公司 株式会社川崎製作所 有限会社鷺之山石材商会 浦芳樹 奥祐司  
兔子尾大 土方大 Tommy Simoens



※新型コロナウイルスの影響により、開催日時の変更や入場制限、ご連絡先の記入等へのご協力をお願いする場合がございます。  
ご来廊の際には、必ずマスクをご着用いただき、体調の優れない方はご来廊をお控えくださいますようお願い申し上げます。最新情報は、Webサイト、SNS等をご確認ください。

■取材、掲載用写真の貸出など、ご質問がございましたら下記までお問い合わせ下さい。■

gallery αM ギャラリーアルファエム e-mail: [alpham@musabi.ac.jp](mailto:alpham@musabi.ac.jp) / tel: 03-5829-9109 / fax: 03-5829-9166  
武蔵野美術大学 大学企画グループ 社会連携チーム(ギャラリー不在時) tel: 042-342-7945 / fax: 042-342-6087

「約束の凝集」最初の展覧会は、ベルギー、中国、メキシコ、日本を拠点に活動する曾根裕の個展である。東京では9年ぶりの個展となる本展は、「石器時代最後の夜」と名づけられており、3点のインスタレーション《The Last Night of the Stone Age》、《Birthday Party 1965-2020》、《Double Log (Washinoyama tuff)》から構成される。

## The Last Night of the Stone Age

気が遠くなるほどの昔、自然銅を熱して溶かそうとする人類がいた。当時の技術ではあまり高温にできないためか、彼らの溶かした銅は一晩たたずに冷え固まることになる。「つまり」と曾根は言う。

「つまり、それが石器時代最後の夜なんだ。」

焼（く）べていた火がとろけるように静止し、銅は固体と液体の間を揺れながら、不定形の、しかしある一定の形へととどまっていくな。石器時代最後の夜はこうして具体的に想像が可能だ。もちろん、さまざまな人々がさまざまな鉱物を火に焼べたはずで、複数のルートから次の時代が始まったんだろう（ここでは単純に金石併用時代、青銅器時代、鉄器時代などとわけるとはやめておこう）。だからそれぞれの地域で、それぞれの文明で、複数の石器時代最後の夜があったはずだ。

しかしいっぽうで、曾根は（あるいは私たちは）現在も石を利用し続けながら生きている。90年代の半ばに大理石という素材に出会って以来、曾根のつくる作品の多くは石であり、中国でも日本でも、曾根の周りには多くの石工たちがいる。「作品をつくる過程の90%は石を破壊することだ」と曾根は笑うが、曾根を含む石工たちの技術は抜きんできて、彼らは今日もグラインダーで石を削り生活を営む。だから、石器時代はまだ続いているのだ。石器時代最後の夜は、ずっと未来に訪れる。

曾根は今回、25年歳の離れたアーティスト永田康祐と「四半世紀」というユニットを結成し、大理石でパソコンを制作した。現在もまだ自分たちは石器時代にいるのだという強い確信とともに、最新の環境にも対応しうる水冷式PCをつくること。これは、ふたりのアーティストのまったく共同制作である。PCを経由して投影される映像は、石を砕き、削り、粉塵に塗れ、互いに異なる言語をぶつけ合って最高の作品をつくらうとする者たちの四半世紀にわたる労働／制作の記録であり、石と人間の共存の記録である。

## Birthday Party 1965-2020

1997年のミュンスター彫刻プロジェクトで、曾根は毎日のように自分の「バースデーパーティー」を開き、その様子を《Birthday Party》という映像にまとめている。繰り返し何度も誕生日を祝われるその映像のなかでは、嘘と現実、一回性と反復、個人的なこととパブリックなことという矛盾し合う要素が、矛盾したままに祝福されている。

ほとんど知られていないが、この試みは97年以前から、そして97年以降も（曾根の子供が誕生日会は毎日するものだと思い込んだためしばらく中断しつつ）断続的に行われてきた。そうして撮り溜められていた映像を加えて新たに制作されたのが《Birthday Party 1965-2020》である。《Birthday Party 1965-2020》と《The Last Night of the Stone Age》は同じ大理石のPCから出力されているのだが、過去と未来を大きく行き来しながら伸びていく力と、毎日を反転し続けながら刻んでいく力とが、空間を貫くこととなる。

## Double Log (Washinoyama tuff)

鷲ノ山は香川県に位置する標高322mの山である。そこで採掘される石は珍重され、古墳時代にはすでに近畿圏にも流通するほどだった。曾根は本展の制作と並行して、鷲ノ山にスタジオを構えるべく奮闘している。わずか1年ほどの期間であるが、その時間は濃密であり、現地で出会った大工の浦さんや、石工の大さんたちとの協働が、この展覧会／スタジオを基礎づけている。《Double Log (Washinoyama tuff)》とは、モチーフと素材の反転を基礎としたコンセプチュアルな彫刻である以前に、端的な事実として、鷲ノ山で生まれた最初の曾根作品である。それは、鷲ノ山の凝灰岩でできた「二股の丸太（ダブルログ）」であると同時に、鷲ノ山での協働制作が始まったことを告げる、純度100%の「二重の記録（ダブルログ）」なのだ。

長谷川新（インディペンデントキュレーター）

●曾根裕(そね・ゆたか)

1965年生まれ。中国、メキシコ、ベルギー、日本にて活動を行う。主な個展に「Obsidian」四方当代美術館(南京、2017年)、「Day and Night」David Zwirner(ニューヨーク、2016年)、「Perfect Moment」東京オペラシティアートギャラリー(東京、2011年)、「Like Looking for Snow Leopard」Kunsthalle Bern(ベルン、2006年)など。主なグループ展に、「東京インディペンデント」陳列館(東京、2019年)、「Sanguine: Luc Tuymans on Baroque」プラダ財団(ミラノ、2018年)、ホイットニービエンナーレ(ニューヨーク、2004年)、「ヘテロトピアス(他なる場所)― 曾根裕 小谷元彦」第50回ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館(ヴェネツィア、2003年)、「ダブルリバー 島への旅」豊田市美術館(愛知、2002年)、「EGOFUGAL」第7回イスタンブール・ビエンナーレ(イスタンブール、2001年)、「移動する都市」(ウィーン、ボルドー、ニューヨーク、フムレバク、ロンドン、バンコク、ヘルシンキ、1997-1999年)、第4回ミュンスター彫刻プロジェクト(ミュンスター、1997年)など。



四半世紀 (曾根裕 + 永田康祐)  
《PC: The Last Night of the Stone Age (Prototype v1)》2020年



曾根裕  
《Birthday Party 1965-2020》2020年

キュレーターズノート (2020.1.16) 長谷川新

2018年の暮れ、「αMでゲストキュレーターをしませんか」と連絡をうけて最初に考えたことは、「絶滅」についての展覧会だった。風の谷のナウシカの原作漫画を繰り返し読んでいて、タイトルは仮で「ノーマンズランド」とつけていた。それはとても暗いように見えるけれど、別に悲観的であるわけではなく、むしろそれを避けてアートはできないんじゃないか、という中途半端にリアルな手応えに基づいたものだった。他方で、できるだけ具体的であろうとも考えていて、開場時間を13時〜20時へと変更したり、初日のアーティストトーク(とその文字起こし)をやめてカタログをもっといろんな読み方ができるようにしようとか、オリンピックシーズンの鑑賞/労働条件を鑑みて、展示はせず別時間の使い方ができるようにしよう、と決めたりもしていた。このちぐはぐさはなんなのだろう、と自分でもよくわからなかった。でもいまははっきり書けることがある。

各位が培ってきた技術は、「妥協」のために、つまりは部分的であったり矮小化されて行使されるべきではない。アートは、「アートなんて無意味だ」とか「どうせいつか死ぬ」とかいう地点にたどり着いてしまってから、むしろそこから、そこをどう折り返して、選ってくるか、という、いわば「帰還の技術」の連続である。虚無と相対化の荒野は、到達地点であったとしても、目的地では決してない。無意味かもしれない、けど、やりたいんだ、と踵を返す。

妥協を「約束の凝集(Com-Promise)」として、途方もなく前向きに考える。それが妥協ではなく約束の凝集である限り、そこには未来の時間が含まれている。今回のαMは、5人のアーティストが、自分が生きて死ぬ時代に、それぞれのやり方で、未来を確信する技術の、研鑽と共有です。

追記(2020.7.29)

半年前のキュレーターズノートを見返すと隔世の感があります(恥ずかしいですがそのまま再掲します)。それでも、「はっきり書ける」と書いた部分は今でもはっきり書けます。「約束の凝集」には、確信もあれば、矛盾もあります。アーティストの実践は社会と同じくらい複雑だし、社会はアートと同じくらい吹っ切れている。そういう潔さを心がけたい。でもそれ自体を見せたいわけじゃなく、問われているのはあくまで、どう選ってくるか、です。5人のアーティストの「帰還の技術」を目撃しにきてください。